

IV-13 外出行動が知的障がい児(者)の発達や自立にもたらす効果

秋田大学 学生 ○酒井 瑛一
正会員 木村 一裕

1. はじめに

交通（外出）需要はある目的を達成するために、派生的に生じる需要であり、日常生活の中で欠かすことのできないものである。とくに障がい者にとっては、自立を維持するための重要な行動として位置づけられる。とりわけ、知的障がいは他の障がいと異なり、人間発達の観点からも、交通（外出）は重要な意義を有している。その意味で、今後知的障がい者が地域において、外出して生活できる環境整備が極めて重要になるといえる。

以上のことから、本研究では知的障がい者の外出実態を把握した上で、障がい者の自立を促進させるための要因を把握するとともに、外出できるということがどのような効果や意義を有しているのかを明らかにし、総合的に彼らに配慮した外出環境整備のあり方を考察することを目的としている。

2. 知的障がい者の外出実態

(1) アンケート調査概要

本研究は、15歳以上の知的障がい者とその保護者を対象にアンケート調査を実施した。14歳以下は基本的な生活習慣の修得を主とした教育段階であるため、対象から除いている。調査概要は表-1の通りである。

表-1 アンケート調査概要

調査日時	平成17年12月、平成18年1月
有効回収数	152票(回収率64%)
対象施設	秋田県立横手養護学校 ウェルビューいずみ 授産施設 授産施設 虹のいえ 秋田県立薬田養護学校 秋田大学教育文化学部付属養護学校

(2) 日常生活の外出状況

日常生活の外出回数は、「週5回」、「毎日」の割合が高く、全体の平均回数では4.3回を示した。また、外出目的の2大項目は、「通勤・通学」、「買い物」でありともに高い数値を示している。その他にも、「イベントへの参加」、「趣味・娯楽」等、幅広く外出を行っていることが理解できる。外出形態については、付き添い・グループ行動が最も多くなっており、一緒に行動する

人は、主として両親である。

外出経験のマイナス面としては、ソフト面に関するものが最も多く、「店員やバスの運転手などに嫌な顔をされた」、「よくジロジロ見られる」等の事例が見られた。また失敗した経験としては、迷子に関するものが多くみられた。

表-2 日常生活の外出状況

外出回数	週1回:11.1% 週2~3回:5.6% 週4回:2.8% 週5回:41.7% 毎日27.8% その他11.1%
外出目的	買い物:22.0% 習い事:0.8% イベント:7.9% 散歩:6.3% 運動:3.1% 通学・通勤:23.6% 息抜き:2.4% 趣味・娯楽:8.7% 旅行:5.5% 通院:10.2% 食事:8.7% その他:0.8%
外出形態	単独行動:17.0% 付き添い・グループ行動:55.3% 両方:27.7%
一緒に行動する人	両親:63.6% 友達:14.5% 先生:12.7% ボランティア:3.6% その他:5.5%
外出経験(プラス面)	買い物:28% 地域との関わり:7% 交通機関の利用:16% 友達:7% 興味:15% 社会のマナー:15% ソフト面:10% その他:6%
外出経験(マイナス面)	迷子:19% コミュニケーション:8% ハード面:16% ソフト面:57%

3. 外出がもたらす効果

(1) 調査対象者の現状の生活能力レベル

調査対象者の現状の生活能力レベルを把握するため、S-M 社会生活能力検査（知的障がい児の社会生活能力を測定するための検査）を参考に、3段階評価を行った。それぞれの項目の特徴は、以下の通りである。

表-3 生活能力の特徴

身辺自立	衣服の着脱、食事などの身辺自立に関する生活能力
移動	自分の行きたい所へ移動するための生活行動能力
作業	道具の扱いなどの作業遂行に関する生活能力
意思交換	ことばや文字などによるコミュニケーション能力
集団参加	社会生活への参加の具合を示す生活行動能力
自己統制	わがままを抑え、自己の行動を責任を持って目的に方向づける能力

表-4 は現状の生活能力の度合いを示したものである。身辺自立では、7割以上が「1人でできる」と回答しており、「ある程度できる」も合わせると9割以上を占める。これより、食事や衣服の着脱などの身の回りのことについては、一人で出来ていることがわかる。しかし、それ以外の項目では、「1人では難しい」と回答している割合の方が多くなっている。

表-4 現状の生活能力の度合い

	一人できる	ある程度できる	一人では難しい (できない)
身辺自立	73.7%	24.6%	1.8%
移動	24.6%	35.1%	40.4%
作業	22.8%	36.8%	40.4%
意思交換	14.0%	33.3%	52.6%
集団参加	30.4%	28.6%	41.1%
自己統制	28.1%	31.6%	40.4%

(2) 外出を効率的に行うための要因

表-3 の中で、外出行動と深く関連性のある項目「移動」、「意思交換」、「自己統制」の3つに注目し、移動の「1人では難しい」を除いた項目でグループ分けした。

表-5 グループ分け

	移動	自己統制	意思交換
グループ1	○	×	×
グループ2	○	○	×
グループ3	○	○	○

○:できる
×:できない

このグループと知的障がい者自身が感じている外出目的別のイメージを比較し、言語連想法を用いて分析を行った。言語連想法とは、ある刺激語について思いついたイメージをあげてもらい、調査対象者の抱えている内的なイメージを把握する方法である。本研究では、外出目的を言語連想法の刺激語とし、反応語として社会性からマイナス面までの語句を18個設定した。

表-6 言語の設定

反応語の特徴	反応語
社会性	「社会勉強」、「会話」、「あいさつ」、「友達」
好奇心	「行きたい」、「好き」
癒し(メンタル面)	「楽しい」、「生きがい」、「落ち着く」、「うれしい」
体調面	「疲れる」、「リハビリ」、「健康」
マイナス面	「怖い」、「不安」、「つらい」、「面倒くさい」
その他	「大切」、「習慣」
刺激語	
(1)買い物 (2)習い事 (3)イベントへの参加 (4)散歩・運動	
(5)通勤・通学 (6)趣味・娯楽 (7)旅行	

外出目的別のイメージと比較したものが、図-1である。メンタル面の癒しに関しては、外出行動レベルに関係なく割合が高くなっている。グループごとにみると、グループ1,2ではマイナス面の割合が高く、社会性の割合とほぼ同じ数値を示している。グループ3ではマイナス面の割合も少なく、癒しの効果、好奇心、社会性の向上へつながっている。グループ1,2とグループ3の違いは、意思交換ができるかどうかであることより、外出を効率的に行うためには意思交換が必要不可欠であることが理解できる。また、好奇心においては、グループ1,2で値が高くなっていることから、意思交換が難しく失敗はするものの、外出の効果として好奇心を抱くことに貢献していることが理解できる。

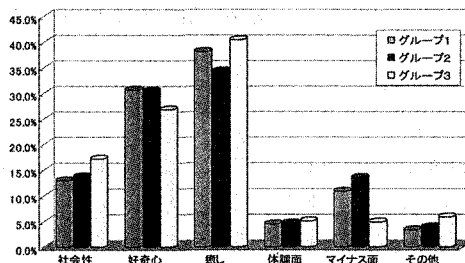


図-1 グループ分けによる比較

(3) 外出環境整備、充実の必要性

生活能力項目の中の「移動」の充実と外出行動との関連性を把握するため、「移動」全体について再度グループ分けを行い分析した。

表-7 移動に着目したグループ分け

	意思交換	移動
意思交換グループ	○	×
意思交換・移動グループ	○	○

○:できる
×:できない

分析の結果、図-2に示すように、移動レベルが充実することで、社会性の項目が上昇することが示された。また、社会性の項目の詳細をみると、「あいさつ」、「会話」、「友達」の要素が高くなっていることから、移動レベルの充実が社会性の自立項目の向上につながることがわかる。

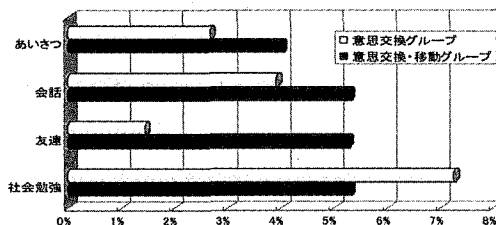


図-2 社会性項目の詳細

4. まとめ

知的障がい者にとって、外出を行うことは、社会性の自立項目の向上につながるなど、自身の発達に大きな役割を果たすことがわかった。また、外出経験の事例より、ハード面に関しては現状の交通バリアフリー法で十分対応できるが、ソフト面に関しては現状のままでは不十分であることが理解できた。今後これまでに以上知覚障がい者に対する理解、そして地域による連携が必要になると考えられる。

最後に、本研究を進めるにあたってご協力を頂きました授産施設ならびに養護学校のみなさまに感謝の意を表します。